

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

雪の正月

「庄屋さん、わしらのために、総ての財産を投げ出して、村を救って下さったのに、わしらは何もせずに陰口をたたいてばかりいた」

「五年の間、洪水が起きることはなかった。これも庄屋さんのお陰かもしれないのお」

「竜神さまの祟りが有るといふのも、嘘かもしれないのお」

「それでも、おゆうさんが亡くなりなされたし、大奥さまも、おゆうさんを追うように亡くなりなされたし……」

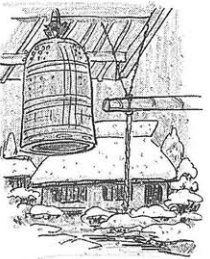
「おゆうさんは、胸の病気で仕方の無いことだった。大奥さまは、いい歳で……」

「庄さんは、自分の財産を投げ打って、たいしたことを遣り遂げなされた」

村の衆は、手の平を返したように、ひそひそと言いつつ合った。

畑に出来た野菜を手に、謝りに来る者もいれば、気持ち素直に表現できず、下を向いて通る者もいたけれど、彌兵衛は気にも留めなかった。

娘のゆうと、母のサトを一度に失った周藤家の中で、必死に悲しみに耐えている妻のクニの姿に彌兵衛は、せめて労いの言葉をかけてやらなければ……と思いながら、日は過ぎて行った。季節が変わり、初冬の冷たい風が、障子の隙間を吹き抜け、ヒューというような音を立てていた。



画 寺戸良信

あれほど賑やかだった周藤家の中に今は、彌兵衛の他には、クニと五郎太の二人しか居なかった。クニも五郎太も無駄口をたたくことも無く黙々と仕事をこなす、仕事をすることで、悲しみを紛らしているように見えた。

彌兵衛は、正月までの何日かをクニと過ごすことこそ、クニの心を癒す最良の薬であろうと、自分に言い聞かせた。

——愚痴ひとつこぼさず、クニは私の仕事をよく支えてくれた。クニが居なかつたら、私は、この川普請を完成させることが出来なかつたかもしれない。——

彌兵衛は思った。

大晦日の夜から音も無く深々と雪が降り、元旦には日吉村は、一面の銀世界だった。

普段の年ならば、村の人たちが夜の明けるのを待ち兼ねて年始の挨拶の列を作り、彌兵衛もクニも、その接待に大童であったが、サトとゆうを亡くしたばかりの周藤家の門前は訪れる人も無く、ただ、ひっそりと静かだった。

神仏に手を合わせ、会話の無い朝食を済ませると、五郎太は隣村の親戚に新年の挨拶に行くことを口実にして、周藤家を後にした。

ゆうとの思い出の詰まった周藤家を少しでも離れてみたかったのである。

「クニ、この広い家で、とうとう、おまえと二人っきりになってしまったなあ」

彌兵衛は、クニに語りかけた。

「長い間、苦勞をかけた。ここへ嫁がなければ、おまえにも違った人生が有ったろうに」

クニは何も言わなかった。